



人生100年時代「目を開けて私をもっと見て」
家族の老いを受け入れることができずか。
介護スタッフちくわの見聞録③

「こんなこともできないの」「今までこんな事なかったから、ショックを受けた」

認知症が進むとできなくなることで、判らなくなるが増えていきます。認知症の方も辛いのですが、介護者も認知症の方のできなくなっていく姿を受け入れることができずに、戸惑いと葛藤があります。

介護されているご家族が一番辛いのは排泄の失敗だと思います

「ごめんなさい。」「赤ちゃんみたいだ。」「排泄に失敗した方の衣類の交換をする時によくこのような言葉をかけられます。失敗したけど、このことを告げると怒られるかもしれない。迷惑がかかる。どうして良いか判らない。ご本人はズボンをおいで排泄をしていると思っても、きちんと下ろしきれずに汚してしまったりします。また、排泄している感覚が判らなくなり、立ち上がった時に排尿がある人もいます。羞恥心から汚れた衣類を自分で始末をしようと隠すこともあります。「漏らしたらいけない。」「と何回もトイレに行く方もいます。汚れたからとパットをトイレで流して詰まらせてしまう方もいます。

「俺、大丈夫かな。」

認知症の方がつぶやいた言葉です。できなくなったことや判らなくなったことが増えて認知症の方は不安がいっぱいです。「大丈夫です。私が覚えていきますから。」の声掛けに安堵されます。

「買い物に出ただけだ。娘に会いに行っただけだ」

徘徊と言われるひとり歩き。目的があつて歩き出したけど、判っていたはずの道が判らなくなる。また何の目的で出たかも忘れてしまいます。どうして良いか、判らない。不安の中、迷路の出口を求めてひたすら歩き続け、遠くで保護されたり、駐車場で寝込んでいて発見される方もいます。仕事に行くつもりだったのか、仕事で通った道の日光街道を自転車でひたすら走り、埼玉まで行ってしまった方がいます。連絡先を書いた布を衣類に縫い付けていたおかげで、連絡を受け、家族が迎えに行くことができたそうです。

「今までできていたのに、なぜできないの。」

「ご家族は認知症や老いによって起きたことと頭では判っていても、思わず怒ってしまい、自己嫌悪に陥ってしまいます。でも、言われた本人は覚えていない。介

護に携わらない家族は共感してくれない。介護者は言いようのない思いを日々抱いています。

「助けてと言えぬ人を作ろう。」

人生100年時代となり、肉親や友人との別れを何度も繰り返しています。その辛い記憶を消す為に認知症があるのかなと思ふことがあります。

誰もがなり得る認知症と老い。好んで、認知症になったり老いる人はいません。

計算問題が解けなくなり、時計の時間も読めない。家族の顔も判らなくなる。きれい好きだったのに入浴を嫌がり、暴れる。年月を経てできなくなるが増えています。ご本人も辛いですが、愛する人の変化は家族にとってはとても辛いと思います。

少ない年金の中で、オムツ代はかかる。介護を頼んでもお金が出ていく。介護者自身も持病を抱えている。老々介護で介護者自身がお金の問題、先行きの不安抱えている方もいます。介護者には、話を聴いてくれる、状況を把握して寄り添って共有してくれる人など、人の援助が必要。誰かに相談することで、解決策が生まれ、より気持ちの平穏が保たれるでしょう。

介護者の笑顔は介護を受けている人に安心と笑顔を与えてくれます。